

金石書画拾遺(24)

木 雜

しんりゅうほんらんていじょ
神龍本蘭亭序

木 雜 室
伊 藤 滋

しんりゅうほんらんていじょ
神龍本蘭亭序

三五三年

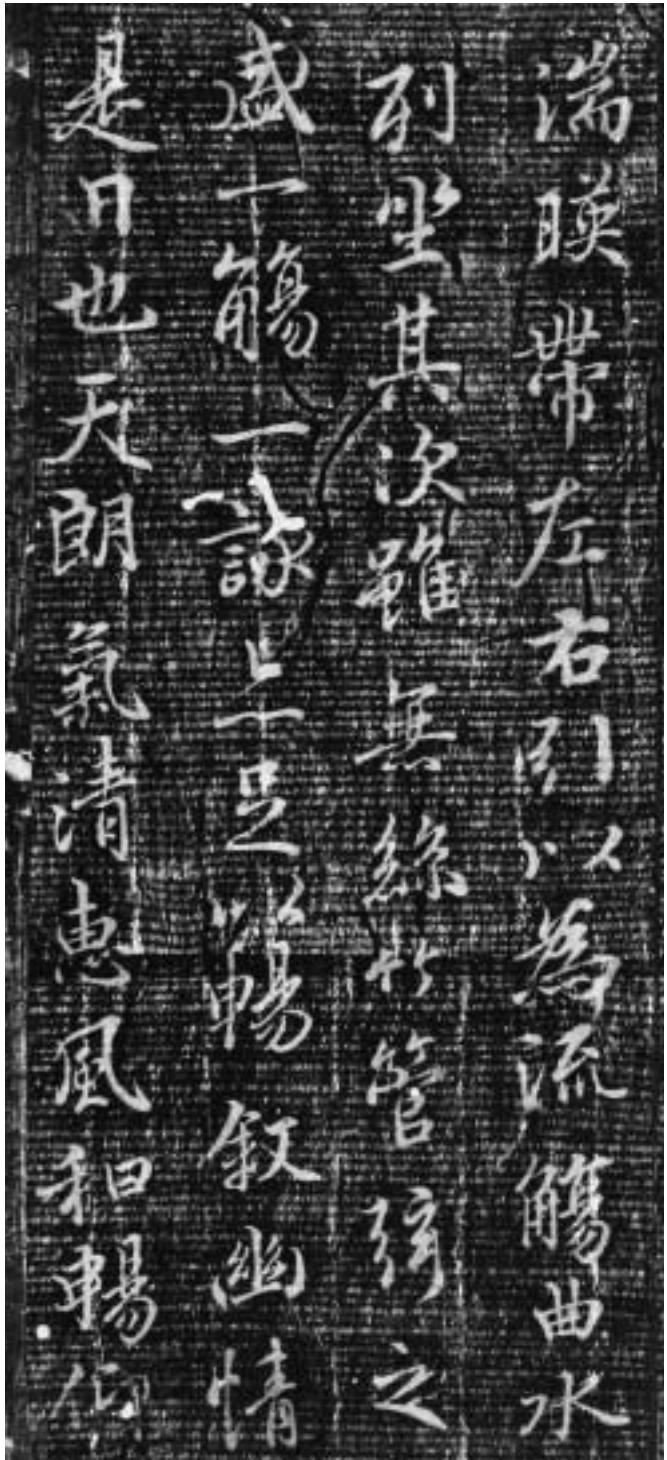
(東晋・永和九年)

宋拓福鼎蘭亭序



書聖・王羲之の行書の最高傑作とされる「蘭亭序」の原蹟は存在せず、臨模本や刻本が伝来するのみである。この「宋拓神龍本」は、明の豊坊刻本とも異なる。この本は、大正二年癸丑の年の京都蘭亭会に出品された。その模様を報じた大阪朝日新聞の大正二年四月二

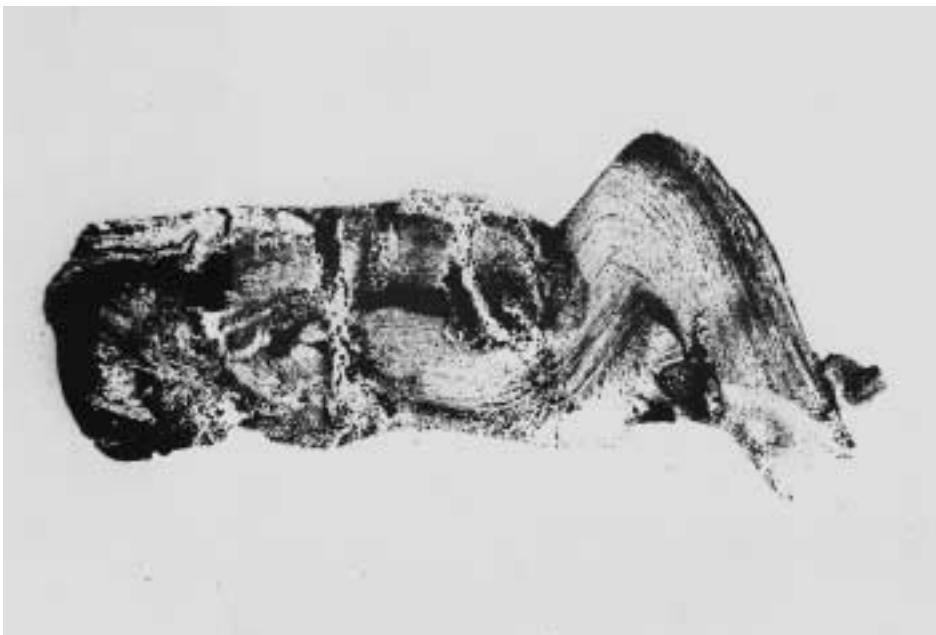
永和九年歲在癸卯暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊事也群賢畢少長咸集此地亦有崇山峻領茂林脩竹又有清流激



十日の記事によると、四種類の『蘭亭序』の名品が紹介されている。その一つは犬養木堂翁所蔵の『宋拓定武本』、もう一つは内藤湖南蔵の『宋拓神龍本』、あの二件は羅振玉蔵の『宋拓定武游丞相本』と『宋拓開皇本』である。そのうちの内藤湖南蔵本がここに示したものである。跋文を見ると所蔵者は久野錦浦とある。惜しいことに、この本は、巻末の四行が旧く失われ、清朝初期に金石家王澍により補書されている。拓墨も明以前の古いものであり、宋拓と称するに相応しい書品を具えている。王澍、李鴻裔、朱福清、趙烈文、吳雲の鑑賞印や題記があり、大正二年に羅振玉、内藤湖南の跋文が付された。この帖は大正の蘭亭会の折にコロタイプ折帖装で油谷博文堂から一度だけ出版された。この印刷本すら非常に珍しい。現在は、平凡社の『書道全集』巻四にこの印刷本から転印されている。

書道藝術院 第1回展 出品作家

「七一一」



15×22cm

比田井天来が中学の歴史の教科書にも載るほどの書家であり、南谷氏は天来のご子息（次男、明治45年生まれ）で、やはり著名な書家であることは10代の頃から知っています。私が書を志した20代の初め頃、東京・上野の美術館で先生をお見かけしたのを覚えていました。しかし、その後お目にかかる機会はありませんでした。

昭和20年に発表された前衛的な作品「電のヴァリエーション」を始めとする南谷氏の作品や書暦については多くの書籍、雑誌に書かれていますが、今回の原稿を書くに当たって私は、存じ上げない南谷氏を知りたいと思い、先生のお嬢さんで出版社のオーナーでもある和子さんから、DVD「比田井南谷」と、南谷氏自ら編纂された自伝とも言える「NANKOKU HIDAI」をお借りしました。その中で特に印象に残ったことを書いてみようと思います。

南谷氏は少年時代から音楽に対する関心が高く、バイオリンを習って20歳の頃にはプロの域に達していました。しかし父・天来に説得されて音楽への道を断念し、昭和30年代頃からは欧米、特にアメリカのアーティスト達との交流を深めて、「サン・パウロ・ビエンナーレ展」を皮切りに、多くの展覧会への出品、個展を頻繁に開く一方、歐米の大学などで書道史、書法の講演や指導もなさっていました。

「彼等と対等に議論するには、英語も堪能でなければ」と、早くから英会話を勉強し、ネイティブ並みの英語で話していたそうです。南谷氏は世界を視野に入れて活動した、スケールの大きいアーティストだったのです。「言葉として読めなくとも、見る人を感動させるのは、変化に富んだ力強い線の表情」とおっしゃった南谷氏の言葉も、強く印象に残っています。

（香川倫子記）

比田井 南谷

書のひろば

理事長 恩地春洋

第60回毎日書道展の概要(I)

- 平成20年度、第60回毎日書道展の概要、記念事業案が発表されたので紹介しておく。

◇第4次改革委員会の編成

- | | | |
|----------------|-------------------|------|
| 委員 | 漢字 | 中村雲龍 |
| かな | 近詩 | 船本芳雲 |
| 三宅相舟 | 永森蒼齋 | 辻元大雲 |
| 赤平泰処 | 仲川恭司 | 柳碧蘇 |
| 水川舟芳 | 篆刻 | 遠藤彊 |
| 前衛 | 中原芳秋 | 吉川寿一 |
| 経過 | (H 19・10・19) | |
| 57回～59回展までの改革 | 平成16年、改革基本方針決定 | |
| かな部 I・II類に分ける。 | 漢字部 I・II類同時出題認める。 | |
| 2、佳作賞の新設など賞の改革 | 3、作品集・名鑑の改廃など | |
| 全部門の未表記鑑別（篆・刻を | | |

国際書法大展ソウル展

創立30周年を迎えた国際書法芸術聯合韓国本部が、アジア書道大展参加の毎日書道会を通して作品出品の要請があり、16団体が参加した。日本から25人が参加し、祝賀のため恩地春洋ら6名が紅葉のソウルを訪問交流を深めた。



盛大だった歓送迎会。翌日中国団は濟州島観光のあと帰国。

(中国) 尉天池、李嘯 (台湾)
張順興 (マレーシア) 黃金炳
ドネシア) 黄国楠ほか

現代詩文書（三）

広瀬舟雲

風と答えました。
理由は、①の作品の形が日本刀
に見えるからだといい、②は、
フェンシングの剣のようにしな
やかだということでした。どちら
でもなくアラビア風というフ
ランス人もいましたが、まず刀

パリでの個展の時、作品を陳列する
だけではなく、会場でいくつかの試み
をしました。その内の一つが、①②の
書作品について、まず何とよむか。

そしてどちらが西洋風にみえ、どちら
が東洋風にみえるか。と、訪れるフラン
スの人々に尋ねてみたことです。

私は①を西洋風（理由は、西洋の大
理石の橋にみえるから）
②を東洋風（理由は、日本の丸木橋の
ようにみえる）と答えるかと想定して
いたら、フランス人の大部分が、私の
予想とは逆に、①を東洋風、②を西洋

剣の形をイメージすると
は思いもよりませんでし
た。

ちなみにこの作品は、「
ポンヌフ」とカタカナ
4文字を組み合わせて書
いてみたものです。

ボトヌの横画をくっつけ
てみて橋のようになら
り、片仮名4文字ながら
一つの象形文字風になら
ないか試みてみた実験作
です。「ポンヌフ」と
は、セーヌ河に架けら
れた大理石製の美しい
橋の名前で日本語で訳
する「新橋」。



広瀬舟雲書

理由は、日本の丸木橋の
ようにみえるから
と答えるかと想定して
いたら、フランス人の大部分が、私の
予想とは逆に、①を東洋風、②を西洋

1988年パリ個展出品作「ポンヌフ」

前衛書（三）

阿部蕙芳

書道もその一員であり、その修練
がきびしさや理論、そして楽しさと
して道の世界へ導かれていきました。
「芸道」の世界には、精神、修練
を根本しながら技術を学びます。
そして個々の持つ美意識、感性を呼
び起させ、芸術向います。

日本の芸術や芸能は、その元は
中国から伝来した唐様の芸術や芸
能であり、それらが我国に定着し、
風土や習慣、また、先着し和洋化
されたそれらの影響を受けて日本
固有のものとなり、ひとしく「道」
と称すべき境地に到達していました。

前衛書は制作追求から得る必然性
や偶然性、また、偶然がその空間に
必然であるかの決定意識になる時、
限りないその線と点に魅力を感じま
す。

作品の題名の有無について、觀る
方に任せるとか、無題でいい、と言
う方が居られます。私は、作者が
構成する過程と想いを真剣に自身で
受け取り、題名は記すべきだと思っ
ています。

この作品は宇宙を想像し、一本の
線の墨色の変化によって、遠近感を
表現したかった。いかがでしょうか。



「極」 阿部蕙芳書
(70×136cm)

平成19年度 新審査会員作品

II

川崎小枝子（漢）・木村蕉苑（現）・大鹿洋江（前）・菊池昌春（漢）



川崎小枝子
(千葉)

「楽しい世界」



ふと目にした公報の千葉県立姉崎高校開放講座に参加できた事から始まった五十の手習いで紺紙金泥細楷と漢字仮名交りの世界にはまってしましました。「継続は力なり」飯高和子先生の言葉と共にこれからも歩んでもらいます。審査会員昇格は師と仲間のお陰、ありがとうございました。
(小枝子)



大鹿洋江
(東京)

「共」

文字から始まり、文字を忘れ、潜在意識の中から生まれた形、「共」です。

「共」に勉強し、「共」に影響し合う書道芸術院の皆様に心より感謝致します。
師の古典への情熱を手本として、線を鍛え精進していくたいと思います。
(洋江)



菊池昌春
(大阪)

「移」

「書は人なり」恩地春洋先生が、よくおっしゃる言葉です。選んだ字に、墨の色に、一本の線に、今の私は出ているでしょうか。作品に素直に感情移入できるように、勉強を怠らず、経験を積み、努力してまいります。書を続けてこられた方に感謝しながら。

(昌春)



木村蕉苑
(宮城)

「ポトリこぼした水滴が緑の森に虹をかけた」 北川山人詩

大自然の森の中で、森の妖精が微笑みかける。そんな森の息吹を表現したいと思いました。
これから、古典とじっくり向き合い、精一杯、精進を重ねていきたいと思います。
(蕉苑)

◇



ふと目にした公報の千葉県立姉崎高校開放講座に参加できた事から始まった五十の手習いで紺紙金泥細楷と漢字仮名交りの世界にはまってしまいました。「継続は力なり」飯高和子先生の言葉と共にこれからも歩んでもらいます。審査会員昇格は師と仲間のお陰、ありがとうございました。
(小枝子)

「書は人なり」恩地春洋先生が、よくおっしゃる言葉です。選んだ字に、墨の色に、一本の線に、今の私は出ているでしょうか。作品に素直に感情移入できるように、勉強を怠らず、経験を積み、努力してまいります。書を続けてこられた方に感謝しながら。

注

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から何文字臨書してもよい。

(掲載部分以外は不可)
※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
(押印のみ可)



解説

薦季直表は、真賞斎帖のほか、鬱岡齋帖、三希堂帖などにも刻されている。

魏の小楷（鍾繇）は、石刻や写経とは別の風韻を持つものとして古来、学者者に親しまれ、それより出づる豊かな香りや情趣を尊ばれた。（編集部）

訳文

望聖德錄其舊勳矜其老
力氣尚壯必能夙夜保養人
民臣受國家異恩不敢雷同見事不言千犯宸嚴臣繇皇
恐頓首謹言

<よみ>

ことのね(年)に(尔)みねのまつか(可)ぜ
(世)か(可)よぶらしな(奈)り(利)いつ
れのをより(利)しらべそ(曾)めけ(介)む
まつか(可)せのおとに(尔)き(支)みだ
(多)ることのねをひけ遣(ば)ねの日

こゝちこそ(曾)すれ

女三宮御は(者)へうへの御ぶ(不)く
(久)に(尔)な(奈)り(利)た(多)ま
(万)て九月に(尔)ぶ(不)く(久)ぬが
(可)せた(多)まふを(越)き(支)か
(可)せた(多)ま(万)て

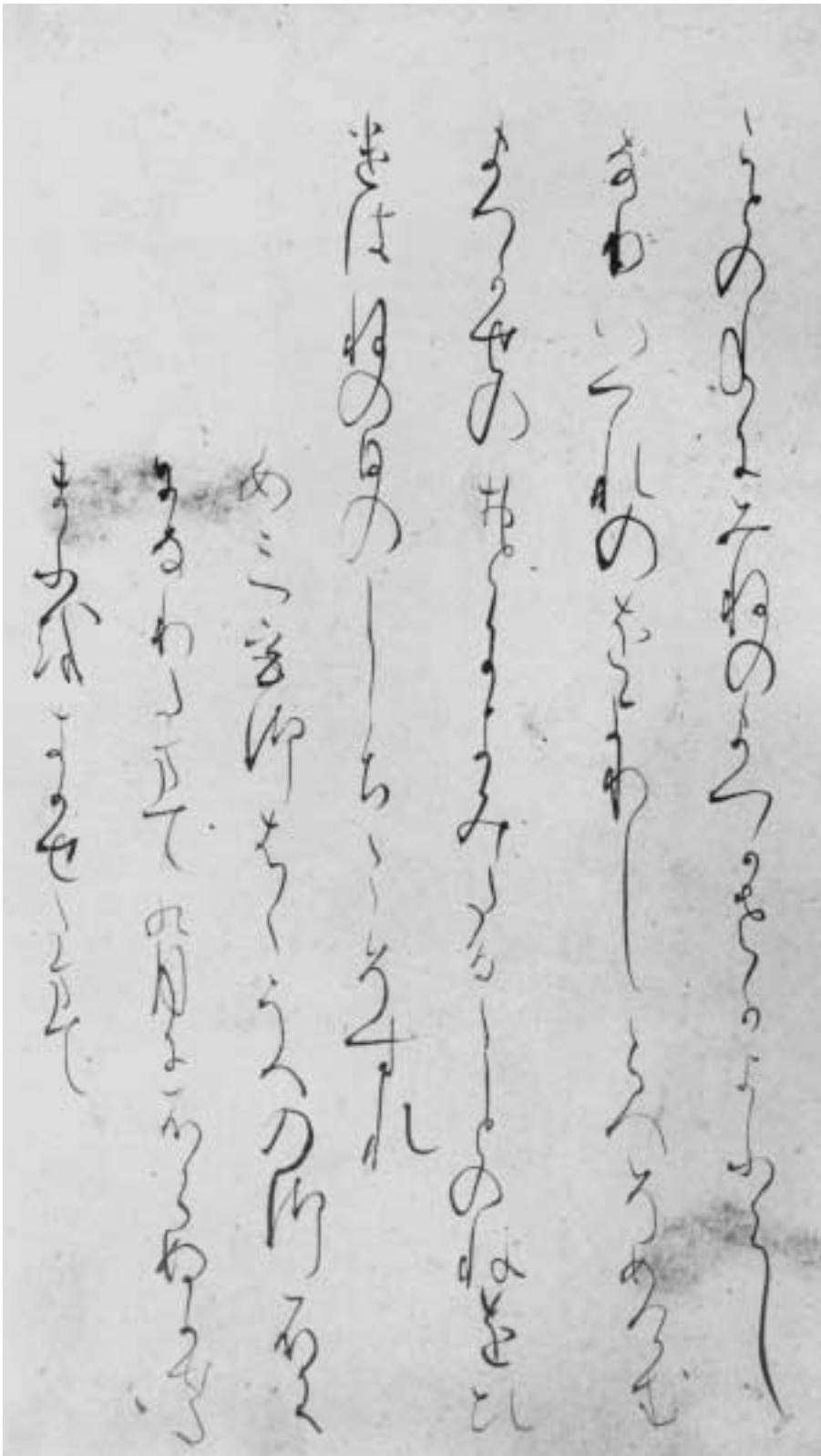
<解説>

小島切の墨色の変化はあまりなく、
濃淡の美しさよりは、率意の疎密の流
れで、華やかな線情の世界を呈してい
る。大体一頁九行書きであるが、稀れ
に裏面のところで七行書きがあり、文

字も大きく別趣の迫力を出していると
ころもある。

書風や料紙からして、筆者は小野道
風より下がり、十一世紀後半ごろと推
定される。

(編集部)



※上の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

最首翠風

萬里無片雲
(万里片雲無し)



萬里無片雲 よみ(万里片雲無し)

書体=自由

隸書体は読み易く、デザイン性もあるので店の看板や、最近ではテレビの字幕にもフォントとして使われています。ただ、これらは文字のデザイナーの手によって作られたものですから、私達書の古典を知るものにとっては、何とも見るに耐えないシロモノです。私は無限の美や、いのちをそこに留めている古典を学び、正しく文化を継承して行きたいもの。例えば同じ八分隸(波磔のある隸書)でも曹全碑と礼器碑の書風は異なります。書者の人間性や、書かれた目的、古典一般に言えば時代性、気候風土、書者の置かれた環境、教養などによって書風は決定づけられるでしょう。しかし、どんな時代の書にも美への意識、生命感が感じられます。

習い方解説 (三)

稻垣小燕

一以貫之
(一を以って之を貫く)

一貫して変わらず道を進むこと。

ゆるぎない心で、じっくりと物事の本質を貫く姿勢を表現したい

と思います。

筆勢内に秘め、鋭い線質を心がけました。四文字のバランスに特に

気をつけて書きました。

“孔子廟堂碑”の中にこの語句が

出てきます。参考にしてください。



書体＝楷書

一以貫之 よみ(一を以って之を貫く)

習い方解説 (三)

黒川 江偉子

ばら色に空くゆらして冬の日は
沈みさりけり屋なみの上に

(窪田 空穂)



この歌を読むと誰にでもそれぞ
れ心に浮かぶなつかしい景色があ
ると思います。ばら色に染まる空、
影絵のような家並、真紅の冬日は、
あっという間に沈みます。

散らし書きの形式は特にきまつ
た法則はないといわれていますが、
古筆の三大色紙、また、元永本古
今和歌集等を参考にしたり、江戸
時代の頃からいわれた、木立、下
り藤、雁の行、雁の乱れ等をふま
えて創作します。

作品を如何に引き立たせるかは、
余白を美しく出せる、散らし書き
の構成が基本です。

よみ方 ば(者)ら色に(耳)そ(慈)ら(良)く(俱)ゆ(遊)らしてふゆの日は(八)

沈み(身)さりけり(利)屋な(那)み(二)の上に

創作

かな規定 秀級以下【一月二十日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可)(たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 よひのまたいで「いりぬるみか(可)づきの
われて(而)ものおも(舟)ふころに(示)もあるあるか(可)な(那)

習い方解説 (三)

平川峰子

心ひあれば 桜花こぼす
(高浜虚子)

かな条幅規定【一月二十日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

平川峰子選書

(高浜虚子)

桜の花は白色の小花でよい匂いを放つ。「心ひま」は潤筆のため、

にじんで太い字になっている。潤

渴の変化も作品のおもしろい要素。

一行書きにしてみたが「心」をひ

らがなに換えて右下から書き始め

「桜」を二行目上から書く構成にすることも。墨つぎした文字は小

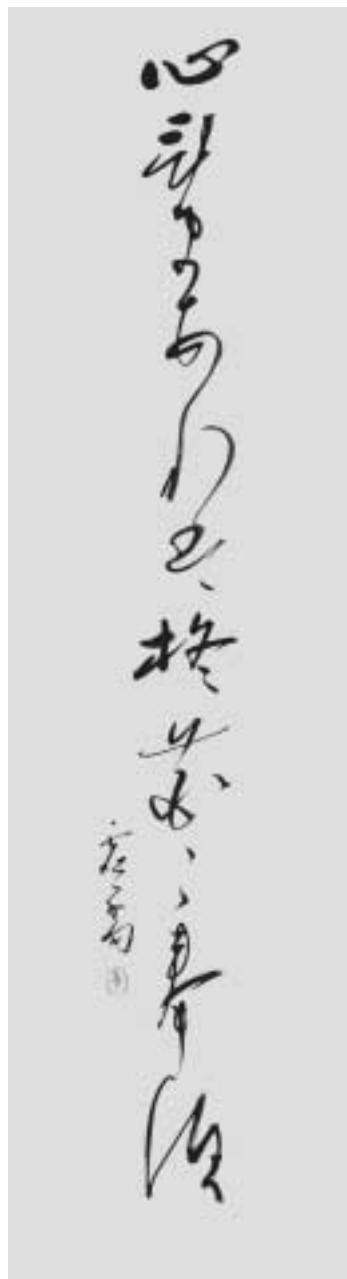
さ目に。連綿線を入れたが俳句の

場合連綿は少なくてよいと思う。

創作

*たて形式に限る

よみ方 心ひ(飛)まあれば(盤)桜花こぼ(奉)す(須) 虚子句



大野祥雲

松下問童子言師採藥去
在此山中雲深不知處

詳文

松下問童子 言師採藥去 只在此山中 雲深不知處
(松下の童子に問えば言う師は藥を探りに去つて只此の山中にあるも雲深うして處を知らずと)

書体=自由

「隠者を尋ねて松の木の下で、召使いの童子に出逢い、聞けば先生は藥草を探りに去つたという。いずれこの山中にあるのであるうが、雲深く閉じて、どこにいるのか、まるで分からぬ。唐・賈島詩。」

あまりにも有名な幻想的な詩です。簡潔な点画で明るく風通しのよい造形にと思ったのですが、結果は逆になつたようです。

漢字条幅規定 秀級以下【一月二十日締めきり】用紙 小画仙紙半切

小川弘舟選書

習い方解説 (三)

小川弘舟

居身百尺樓上放
眼萬卷書中弘舟書

書体=自由

「世俗を離れ高褛に身をおき、万巻の書を読む」優雅な詩です。今月は、顏真卿の楷書を参考に書きました。力強く堂々として、字形は向勢で縦長、用筆法は直筆で「蚕頭燕尾」と言われ、「起筆を蚕の頭のようにまるめて入り、波法の払いを燕の尾のように抜く」ということです。「書道芸術552号から554号」参照。

居身百尺樓上 放眼萬卷書中
(身を百尺の楼上に居き 眼を萬巻の書中に放つ)

習い方解説 (三)

阿部珠翠

冬はつとめて。雪の降りたるは、
つよづきにもあらず、霜の、と向きて
又やまとして、と寒くと、火などもあらず、
おひて、夜まで渡す、とつづき。
匂になくて、ゆくゆきかげば
次桶の火も向き渡がらくなくてやう。
清々納言、枕草子、う、書

今回は、「徒然草」と並ぶ隨筆文学の傑作とされている「枕草子」です。十二月なので、『冬はつとめて』の部分を書きました。

学生時代に、『春はあけぼの』、『夏はよる』、『秋は夕暮』、『冬はつとめて』と暗誦しながら、「つとめてとは、『早朝のことなんだ』」と古文の難しさ、おもしろさを感じたものでした。

平安文学の味が伝わればと、かな文字を連綿し、やわらかな筆致を意識して書きました。じ自分の心地よい運筆で連綿したり、放ち書きにしたりして、書いてみてください。濁点の打ち方は、連綿が終つてから、リズムよく打つとよいでしょう。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

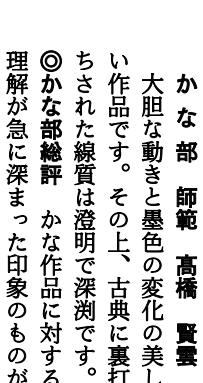
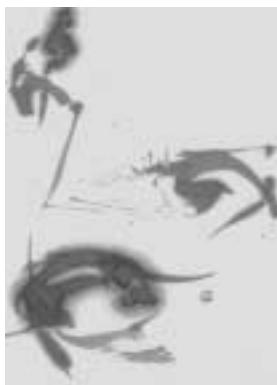
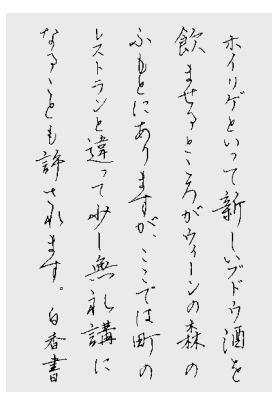
今月の

ホープ作品
各部総評

No. 557

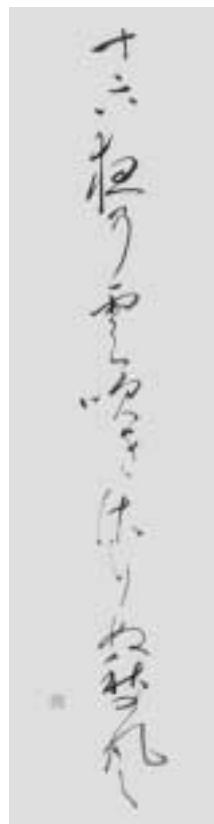
ペン字部 師範 千田 白香
律動的な流れ、漢字からの調和
も美しく、細部まで神経の行き届
いた雅趣に富む作品です。
◎ペン字部総評 使用するペンの
性質を把握したりズムのよい作品
がふえました。下敷にも意を用い
適度の弾力あるものを。(小扇評)

かな条幅部 二段 柳山かつ美
紙幅に対してもやや文字の振幅に
乏しいが、楚々とした筆致でかな
としての流れを汲み期待させる作。
◎かな条幅部総評 今月は昇試の
ためか力作が少なく残念でした。
一行書はいかに点画を横に張り出
すかがポイントです。(洋子評)



前衛書部 特選 高原 梨秀
澄んだ墨色、三点の構築線はリ
ズムに乗ってダンスをしている軽
やかさを感じる。空間も抜群。
◎前衛書部総評 墨色も筆勢もす
ばらしい。楽しい作品が一杯。構
成にもう少しの方あり。(董方評)

現代詩文書部 特選 庄司 咏艶
気迫のこもったこの作は、骨太
で横画を強調し、野趣に富んで配
方法が見られ楽しかったが書き込
み不足が惜しまれる。(石雲評)



漢字部 師範 小沢 泉佳
王鐸を彷彿させる行草表現はリ
ズム感に溢れ、紙面に動きがあつ
てよい。落款もう少し丁寧に。
◎漢字部総評 半紙という限られ
た紙面での表現では、大胆な取
組みは難しいが参考例に頼りすぎ
ず。自分なりの工夫を。(大雲評)

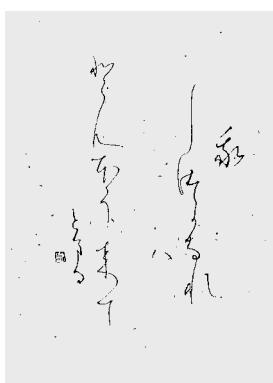


漢字条幅部 師範 星野 英蘭
筆先を紙に突き立てて響きの高
い線が余白に緊張感を生み、リズ
ムに乗った快作。

◎漢字条幅部総評 よく書き込んで自分のリズムで一貫したものは
見る者に安堵感を持たせる。習熟
を心がけたい。(春洋評)



かな部 師範 高橋 賢雲
大胆な動きと墨色の変化の美し
い作品です。その上、古典に裏打
ちされた線質は透明で深淵です。
◎かな部総評 かな作品に対する
理解が急に深まつた印象のものが
増え感激です。今後は、独創的な
展開を希望します。(明子評)



今月の

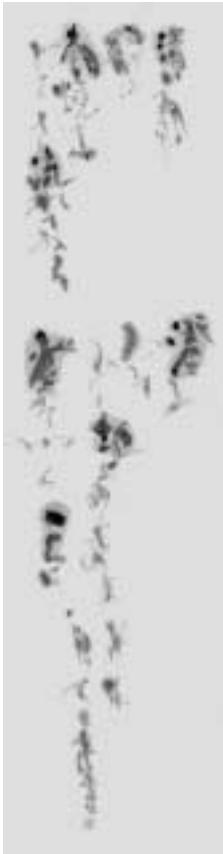
特別研究部優秀作品(特選)

現代詩文書

佐藤華炎

(炎佳)

「室生犀星の詩」



佐藤華炎書

漢字

(玄穹)

尾形紅霞

「登樓萬里春」



尾形紅霞書

- ◆上部から下部の集団への構成が面白く、楽しいリズムを奏でる。青淡墨の淡いじみが効果的で作品に広がりと核となるポイントを形成して妙。(大雲評)
- ◆余白の生かし方がいつも斬新で目を奪うが、これも線やタッチの諄さを別にして意外性で群を抜いている。やや凝りすぎて読みにくい面も。(洋子評)
- ◆口ざさむような紙面を作り、それに合わせて墨色に変化を見せ、小さい字ながら紙面を一体化して見せてくれた。心の流れを感じるよう。(倫子評)
- ◆変わった構成が先ず目をひく。青墨(宿墨)の墨溜りと筆の割れた筆触の交響も楽しい。これだけ筆先が乱れても騒がしくないのは墨の効果か。(春洋評)

- ◆一行、左右の振幅で構成した破体書。渴筆は明るく爽やかだが、不安定な縦長の「里」が落ちつかない「春」字の日が弱くしまらない。(春洋評)
- ◆柔らかく広がりある渴筆が紙面に動きを与えて一行書の平凡さを救っている。(洋子評)
- ◆伸縮に広狭と、思い切った動きで書体を違え楽しい。伸びやかな広がりに対して圧縮された部分が適當だったかどうか。でも新鮮でした。(大雲評)
- ◆大きく活躍する筆意とそれを受ける感じに引き締まった構成で五字の流れを楽しく見せてくれた。空間の生かし方をもう少し考えて見て…。(倫子評)

総評

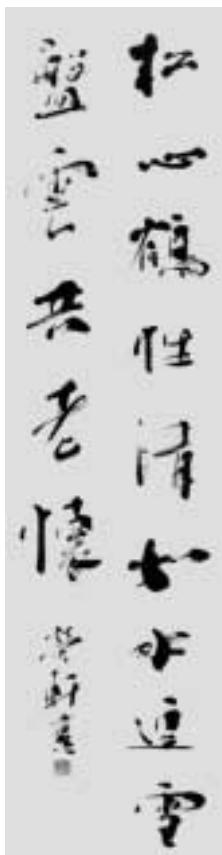
香川峰雲先生の生誕百年記念展で、先生の刻印が、その現代性から大きく再評価されました。前衛書に捺す落款印は、従来の刻風では調和しないため、それが峰雲先生の篆刻の特長です。峰雲先生独自の作風が形成され、春蘭先生、倫子先生をはじめとする前衛書作品に調和する風格の印が刻されました。1、前19)が出品されました。審査の過程で、作品と印の調和について話題となりました。作風と印の風格が不釣合の作品が目につきました。落款印にもっと心配りをして欲しいのです。捺印位置も工夫してください。(萬城)

△特選候補者

前前前前現現現現漢漢漢漢漢
若葉伊那四谷翠柳大雲翠柳大雲
工藤矢野田角鈴木木三村長島加藤
山房弥悠翠翠春景雨紫翠象藤
房生香夢雨美藤苑

(千葉) 漢字 大内熒軒

「七言二句」



書 軒 熒 内 大

◆筆庄の強さが短い線の中に生かされ作品に流れを生じている。印の大きさや字の雰囲気等を統一したら本文がもっと生き生きしたのでは。

(倫子評)

◆行書單体で、静かにぼつぼつと縱画と横画を意識した字形。品よくまとめた明るい作となつた。署名やや大きい感もする。

(春洋評)

◆味わいある筆致での行書單体一行は余白の効果もあり爽やかな仕上り。やや硬めの筆を使用か、小氣味よい打楽器のリズムを感じさせる。

(大雲評)

◆余白を広くとり、弾力あるリズムで淡淡と書き進める。静かで味があるが、型破れなものに果敢に挑んで欲しいと思つたりも…。

(洋子評)

前衛書

(清流) 渋谷充律

「無」

◆上部から流れれるような動きで最後まで息もつかせぬ見せてくれた構成。印

の場所だが切角の余白を寸断してしまった感、動きに併せた所を。

(倫子評)

◆タッチ鮮かで墨色を生かした手腕り

ば。上部と下部共にトリミングして上

下のつなぎを一層鮮かにした。静かで

安定感のある作となつた。

(春洋評)

◆上部の鮮明な動きが爽快である。下部の処理はもう少し省略した方がよかつたか。運筆のリズムの大きさと大胆な筆致を評価したい。

(大雲評)

◆上下の墨量の調子が少々もの足りないが、力感に漲る線のコクに筆者の並々ならぬ勢いが窺える。部分により表現

法を明確に変えて奥深い。

(洋子評)

前衛書

(一貫) 鈴元博貫

「啄木鳥」

鈴元博貫書



渋谷充律書

◆大胆なタッチで、線の大小、潤渴、構成としては面白いし、余白のつかみ方は巧みである。知的な作品制作態度として受けとめた。

(春洋評)

◆白秋の詩の題名を上部に大書し、下部二行の構成が眼をひく。潤渴の変化を明瞭にして、筆融の微妙な味わいを表現している点に魅力あり。

(大雲評)

◆現代詩のこの表現法は結して新しいものではないが、白の把え方は分量、トボけた結体に線の軽妙感が絡み合って独特の風情を醸し出した。

(洋子評)

◆巧みに「にじみ」と「構成」を組み合わせ詩情を味あわせてくれた楽しい作品。書き初めは力身すぎたか少々重い感じがあつたが…。

(倫子評)

漢字研究部
(樂毅論)

選評 小林琴水

今月のホープ作品



木下 美都子

◎漢字研究部總評 樂毅論は氣脈が切れないと、息長く、あわてず、筆先を遊ばせながらゆったりと書くこと。

漢字研究部 特選 木下美都子
原帖の特徴をよくとらえ、確かな用筆で紙にい込んだ線、見事な臨書。筆者はリズムにのせ、筆先を着実に使いこなしているのに心ひかれる。

リズムにのると、とても楽しい臨書作品となるでしょう。線の細い(ピリッとした強さ)、太い線はゆったりとのびやかに、字形のバランスも魅力的である。半紙に四字、六字、八字、細字、それぞれによく研究された作品が多くあった。筆先が常にピッと立っていることが多い。筆先が常にピッと立っていることには注意したい。



み雅政 美優史
どり邦舟子紀子

桂節松玉翠 惠理子
香苑鳳露徑子

吉与雅哲智初
恵子子子江

皓雅琴翠紫 佐
泉子爽江舟子

かな研究部
(本阿弥切)

選評 黒川 江偉子

今月のホープ作品



深光佑
雪子子

雅桂弘
泉香

寿みどり霞

ふみ佐枝子
峰

高橋 初江

◎かな研究部総評　運筆の冴えは、繰返し書く事の多さで極るのではないかと痛感します。用紙も大事な要素です。あまり滑りのわるいものは使用しないでください。

行尾の字間を詰めた本阿弥切特有の急迫感ある、筆使い造形が見事に表現され、日々の修練か。筆線に充実した雰囲気を漂よわせた秀作と思います。

かな研究部成績発表

かな研究部 特選 高橋 初江

秀京翠書道竹正水橋柳泉扇華秀	石秀玉道喜秀華卯玉山正卯權こ京竜英前A五五福正こ秀 習明葉　葉水祥月葉王華月翠だ橋泉峰橋！葉松山華だ水
北東近岡松河伊爪八重花柳照知星英子芳子扇子	松岩阿鈴門熊新遠前知栗星伊吉高佐碓伊都播岡星小高橋丸本島み紅峰枝子江
北東近岡松河伊爪八重花柳照知星英子芳子扇子	九崎部木木脇野谷山島念原藤田橋藤井藤丸本島み紅峰枝子江
春こ汀だけ	愛洋百え史信谷風希代律信深光佑雅桂寿みどり霞峰枝子江
春こ汀だけ	彩玉秀香翠大童正昌澄玉京正N竜大椿声前五遊澄蘭春こ筑湘書艸松水月吟雲泉華苑春松橋華H泉雲翠香橋葉雲春泉春鼎汀だ桜南泉玄
沖吉野佐和彩子祥	岸小富鈴近朝後加佐飯塙近金伊木泉森小米春森西字櫻宇川佐大小伊豆川木
秀大高真入青神山岩木野田上矢か萩明郁よ碧子	田川澤木藤倉藤瀬藤藤澤藤藤澤藤内下木林倉山田澤田井崎々石西嶋藤川木
秀大高真入青神山岩木野田上矢か萩明郁よ碧子	東彩蕙香閑爽良美初紫美松豊良志龍祥晃聲勝睦彩春龍楠優和星一路則紫子香子生恩陽泉子美香苑紅春子佑龍宝泉代香美子峰惠麗子子祥子子風
秀大高真入青神山岩木野田上矢か萩明郁よ碧子	八硯湘麗生安八春春う治詢大正英大石竜遊蓮行大大N大も高水南澤大波街月汀る田扇阪華峰阪習雲紅電阪抽日雲く陵
秀大高真入青神山岩木野田上矢か萩明郁よ碧子	古柴伊佐吉君小熱宮佐木巣工河木吉池内後池遊浅目荒坂川西高飯後佐庄内浜辻石吉足石木杉森岩大濱村德須成木野田上矢寺木多木と
秀大高真入青神山岩木野田上矢か萩明郁よ碧子	久紅春淳順麻香智輝彩萩皓知尚紅紀憲孙み瑠藤章恵喜雅味古よ洋翠光実知淳秋藤恵幸竹龍萩清裕翠泉邦子祐勲美彩蓮子子蘭子子雨溪泉子古雅子萩功よ雲象治萩井塘子子子谷峯江雪峰峯子子
秀大高真入青神山岩木野田上矢か萩明郁よ碧子	玄椿青広八清筑こ藤春春広遊澄大澄生卯藤春石竜大椿湘千竜澄京英大千大千大華大北千利千正明洞昌千大清幕翠翠翠島街流桜だ汀光島雲春阪春大月汀賀春阪崎翠南都泉春橋峰阪葉阪葉阪祥雲陸字雪字漢書苑葉阪張
日橋林熊恒波笠小五八富佐香徳伊田深宮菊天三高下闖今演青安田岩泉寮堀片松飯角戸富加磯河西永岸北菅鳴酒吉澤岸千高比本谷村谷松口十重鼻木史鳳櫻満志富渕しづ美清幸善い敏昌代愛貴琴理代吉美龍翠魯美白光育博萩雅清和悦康悦称花翠雙蘿倫賢舟和鶴蘭心律子栄泉津子仙子洗平高子蘭子泉泉爽子子蕙子栄香春代鈴彩子舟影芳耀敬子薰子祥子子谷峯江雪峰峯子子	千洞英八調三青秀調艸玄東紅泉澄華声東東廣大椿生艸生外泉華塚象華阪葉阪葉阪
名牧宮木神六犬永生波小橋戸新小大橋入平松若横砂金松足村安田篠新後野渡小中中小鈴小高安鈴小佐川鄭岡北石小山氏野崎村下保波銅井駒谷野部井林野本谷山島菜井川岡田立田藤中田岡藤村辺林澤井藤木高野藤木暮久本田又坂川口名略嵇愛等都佳争道宏萩愛華悦幾芳藤都悠彩翠炬正洋萩映万笑楊蒼美祥成信雅翠さ智西杏華香昭節南順十春惠雅子美遊子子玉石枝花華光悦子代萩栄子花華舟子江子美華秀華風子子子子子泉ゑ広鉢華祥楓二子汀宋夜峯子子毅	149

書道芸術院創立60周年記念

役員作品巡回展

併催 関西総局展

会期 平成19年9月4日(火)～9月9日(日)

会場 大阪市立美術館

大阪市の文化を紹介する大阪市立美術館で、例年開かれている57回玄遠社主催の展覧会、二室のうち一室を借用して、書道芸術院創立60周年記念役員作品巡回展を開催することになった。50名の作家のすばらしい作品群を陳列、



会場風景

別にそれらをもりたてるように関西のメンバーや200余名による書道芸術院の毎日展入選以上の作品を展示することにした。砂本社中、畠中社中、岩崎社中、などのご協力により、強力な展覧会が

関西総局長あいさつ



構成されることになった。
来賓の方々にも、9月4日(火)午前中は恩地理事長による巡回展の作品解説が行われた。
午後2時、場所をかえて天王寺都ホテルで祝賀会が開かれた。役員、会員、参列者併せて145名の人々が一堂に会し、小伏小扇さんが司会担当、主催者側のあいさつの後、尋牛会の水嶋山耀先生、関西担当大使の天江喜七郎様、日展会員の江口大象先生、評論家の田宮文平先生のお話を伺い、最後は毎日新聞社の井上修身様にしめくくっていただいだ。

(関西総局長 山下皓映記)

書道芸術院創立60周年記念 役員作品巡回展 北海道支局

会期 12月4日(火)～
12月9日(日)
会場 札幌ギャラリー
大通り美術館
支局長 齋藤雨城



会場風景

役員作品巡回展

併催 北関東総局展（埼玉・栃木・群馬）

会期 平成19年9月21日(金)～9月24日(月)

会場 前橋市民文化会館 大展示室

5年に一度の巡回展が再び巡って来
た。群馬には高崎と前橋に大きな会場
があるが、今回は前橋の「市民文化会
館」を1年前に予約する。20日陳列、
21日開幕。

(初日) 地元の上毛新聞社の記者が取
材に見える。県内で開催される社中展
あるいは個展は年間およそ60、その中
身は等しく師風に統一されているのに
対して、本展は五つの部門からなる総
合展のため多彩にして密度が濃い。院
の活動を広く江湖に問うとともに会員
の書技の向上と親睦を旨とすることを
伝える。

(二日目) 早速、朝刊に記事が載る。
午後2時から恩地理事長による「作品
研究会」が1時間にわたって開かれ、
一般の方も含めて100名に垂んとする参
加者で賑わう。以下は理事長のお話し
のあらましである。

「群馬は大澤雅休・竹胎、中島邑水、
山本聿水、横堀艸風といった大家を輩
出し前衛書の盛んなところ、その開拓
者精神が書道芸術院を支えている。」



会場風景

漢字部—伝統の上に新しいものを積み
上げる時期に来ている。かな部—関東
のかなに刺激を与え、関西にも新しい
力となつて食い込んでいる。

巡回作品—目標を明確に持つこと。

自分の作品が出来上がったと思ったら危
険、燃えるもの、力強さの伝わっていく
ものが大事。構想としては感覚的な

作品、心理的な作品、そして余白につ
いて考えることが大事。最後に「人は
成長していく。生きている間にどれだ
けの仕事ができるか、作品がその証し
となる」と結んで終わる。

続いて午後4時から内外のお客様を
招いて祝賀会を開催。浜谷芳仙常務理
事の「総局と支局の差をさまざまと見
せつけられた」という発言が印象的
だった。院関係では、他に村野大仙、
大野祥雲、黒川江偉子、石井明子、津
田和秋の皆さん方に錦上華を添えてい
ただく。

(三日目) 前線の影響か夜來の雨が終
日続く。そんな中、足を運ばれるお客
さんは有難い。

(最終日) 今回、県書道展の委員・委
嘱あわせておよそ600余名に案内ハガキ



作品研究会

を出すも意外に来場者数が伸びない。
思うに同ハガキを手にしたとき、県外
の団体が群馬に進出して展覧会開催と
いうように単純に受け取られたか。よっ
て地元出品者184名の姓号一覧も添えて
発信したらまた違っていたかも知れな
いと反省する。午後3時閉幕、続いて
作品撤去・搬出をもつて大事業の幕を
閉じる。院の役員をはじめ事務局の方々
には色々とお世話をなりました。ここ
に更めて深謝申し上げ、報告に替えさ
せていただきます。

(北関東総局長 西林乘宣記)



祝賀会

書道芸術院創立60周年記念

役員作品巡回展

併催 東京総局展

会期 平成19年10月2日(火)～10月7日(日)

会場 東京銀座画廊・美術館

緒出来、嬉しく存じました。
この東京総局の巡回展にあたり、本部
の先生方、東京総局の会員、スタッフ
の皆様の厚いご協力ご後援をいただき
ました事、感謝を込めて心より御礼申
し上げます。

(東京総局長 黒川江偉子記)

秋とは名ばかりの連日の猛暑に悩ま
された日々がこの記念展の為にふと息
をひそめたように爽やかな秋晴れとな
りました。

書道芸術院秋季展と同時開催という
事で、昨年2月11日より企画立案して
まいりました。

秋季展と同じ館でとの願い通りに、東
京銀座画廊、美術館で、役員作品巡回
展、東京総局展を開催致しました。
東京の場合、特に銀座という事で、他
の総局、支局と事情が違う為、役員作
品の展示も、他の広々とした美術館で
拝見するのと違い案じましたが、密度
濃く、先生方の精魂込めたお作が身近
に拝見出来ました事は大変良い勉強に
なりました。

また東京総局展は東京、神奈川の審
査会員、審査会員候補、無鑑査の会員
の方々に、半紙大の作品を出品してい
ただき、それぞれ心を込めた作品で、
書道芸術院の漢字、かな、現代詩、篆
刻、刻字、前衛とバラエティ溢れる
展示となり、大変好評でございました。

6日は秋季展の今回から始った審査
会員候補公募作品の表彰式、研究会、
が行われました。
表彰式は、恩地理事長のご挨拶から始
められました。

表彰式は、恩地理事長のご挨拶から始
められました。

祥雲先生、辻元大雲先生、浜谷芳仙先
生、宮澤梅径先生、かなの黒川、と種々
助言意見などあり、まとめて講評に恩地
理事長からの大変有意義なお話があり、
会場を埋めた会員も熱心に活気溢れる
時間を過ごしました。

その後祝賀会には、来賓の毎日書道会
専務理事寺田健一様、評論家麻生泰久
様、毎日書道会理事岸本太郎様からの
温かいお祝辞をいただき、毎日書道会
理事貞政少登様の乾杯、多勢のお客様
もお出でいただき、秋季展と合同での
華やかな祝宴を盛大に出来ました事も
何よりの喜びでございました。

聲香会展もつづきの会場で開催され
モダンなお作品に季節の花が溢れ、連
日沢山の来場者を呼び、賑やかにござ
いました。

一役を終えて
木犀香りけり

江偉子



会場風景



研究会（秋季展会場）



会場風景

